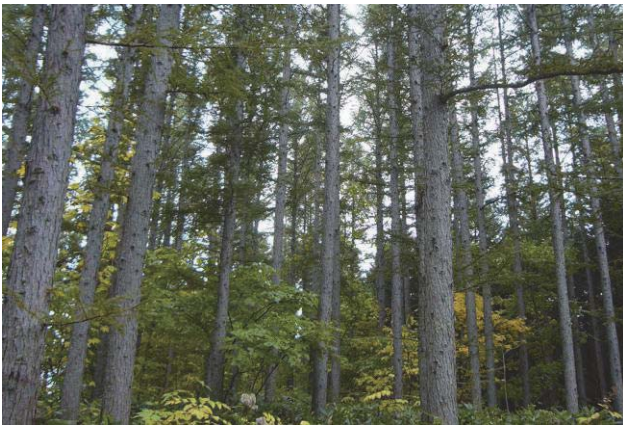


# ウッドマイルズレポート - 下川町地域間交流施設 (北海道下川町) -



## 下川町の循環型林業

下川町は北海道の北部に位置し、人口約 3,600 人の農山村地域である。町の総面積の約 90%が森林であり、古くから森の恵みを楽しむなかで森林・林業を産業の基盤として発展してきた。

町では、「伐ったら必ず植える」という林業の基本姿勢・基本理念のもと、60 年をサイクルとした循環型森林経営（毎年植林 50ha×60 年伐期）を基盤としており、「森林資源循環型のまちづくり」を基本として、森林を活用した様々な取り組みを展開し、地域経済、社会全体の活性化を目指した先駆的・先導的な取り組みを実践している。

その中で、北海道初の世界的な認証である FSC 森林認証の取得、カラマツ、トドマツなどの地域材を使用した住宅建設の推進や木質バイオマスボイラーの導入のほか森林療法（森林セラピー）の事業化など環境に配慮した取り組みを行っている。

こうした取り組みから、先駆的な地球温暖化対策に取り組む自治体を国が支援する「環境モデル都市」の認定を受け、全国のモデルとなる地域づくりを進めている。環境モデル都市アクションプランでは、地域社会の環境を形成する重要な構成要素として「住宅」を掲げ、地域材やウッドマイルズを活用した住宅（地域材活用住宅）を推進している。

### 下川町地域間交流施設

(交流棟 A、B1～B5)

ウッドマイルズレポート

所在地	北海道下川町	構造種類	木造平屋建
主要用途	産業宿泊施設	工事種別	新築
竣工年	2006年11月	敷地面積	5,188.34㎡
設計	(有) 下川町ふるさと開発振興公社	建築面積	390.61㎡
施工	A (株) 市村組	延床面積	1,022.06㎡×1棟
	B1,3,5 (株) 三賢組		B 57.71㎡×5棟
	B2,4 (株) 久保興工務店		A 99.92㎡×1棟
			B 57.71㎡×5棟

#### 総合評価 (☆☆☆)

- ★ 地域の木材の活用  
**ウッドマイルズ 802km** (6ページ)  
使用された木材が森林から消費地まで運ばれた距離 (1㎡あたりの平均距離)
- ★ 木材のトレーサビリティ  
**流通把握度 22%** (7～8ページ)  
使用された木材全ての流通経路について正確に把握している割合
- ★ 木材の輸送エネルギー  
**CO<sub>2</sub>削減率 72%** (9～10ページ)  
使用された木材の輸送過程排出のCO<sub>2</sub>平均値に対して削減された割合

★ B-200kg (1㎡あたり17kg以下)  
 ★ T01～6, 999kg (1㎡あたり10kg以下)  
 ★ T1000～1500kg (1㎡あたり10kg以下)  
 ★ T5～100%  
 ★ 50～71%  
 ★ 50%以下 (1㎡あたり10kg以下)  
 ★ 1～49% (1㎡あたり10kg以下)  
 ★ 49% (1㎡あたり10kg以下)

ウッドマイルズレポートは、施設や住宅などの木造建築物、パネル、集成材などの木製品などに対して、木材の輸送の観点から、輸送エネルギーやトレーサビリティ確保の割合などを評価するものです。

## 下川産業クラスターから始まった地域材活用策

産業クラスターに関する取組が盛んな北海道で 3 番目となる下川産業クラスター研究会が発足し、町内産の木を積極的に使っていく取組も始まった。

持続可能な森林づくりのためには山にお金を還元することが必要だが、主力のカラマツ材は梱包材利用が多く価値が低かったため、価値の高い住宅への利用を検討することになり、地域の森と住宅をつなぐという取り組みが始まった。翌平成 11 年から「下川ブランド住宅開発」プロジェクトが始まり、平成 13 年からは「下川型地域材活用住宅開発」プロジェクトとして発展していった。

下川町における取り組みの特徴は、地域の森林と住宅をつなぎ循環させるという、山村地域の優位性を最大限に生かすための取り組みとしていることである。そのことによって山にお金が還元され、持続可能な森林づくりにつながる。

このような考えのもと、下川町では“森林を背景とした家づくり”を核とした「地材地消」の取り組みを実践してきた。

このような取り組みの成果として、町内では建築用材としての FSC 認証材（地域材）の供給体制が整備され、FSC 認証材を使った住宅の普及が進められており、北海道「地材地消」の先進地となっている。

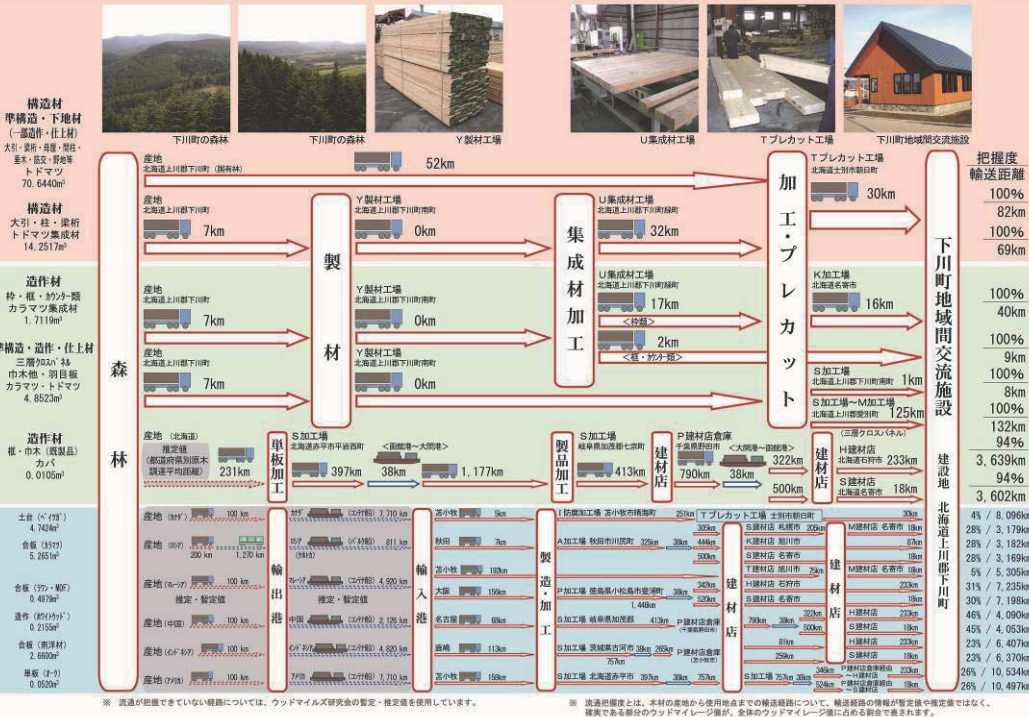


下川町地域間交流施設  
木材の履歴と流通把握度 (トレーサビリティ)

木材の履歴は、各部材がどのような経路を通って運ばれてきたのかを示し、流通把握度は使用された木材の流通経路についての程度把握できているかを示しています。

輸入材の使用量はわずかですが、流通経路の不明な部分の輸送距離が長いため、全体の流通把握度は低くなっています。

流通把握度 22%



ウッドマイルズ評価結果

下川町で初めてウッドマイルズの評価を行ったのが、小規模ログジが建ち並ぶ「下川町地域間交流施設」である。

この施設のウッドマイルズレポート総合評価はだいぶ低い値となった。その理由はウッドマイルズと流通把握度である。大部分の木材は地元産であったが、一部に輸送距離が極端に長く流通経路の把握も難しい国産材や、遠方国からの輸入木材が使用されていた（流通把握度については、地域材使用量に反して評価が低くなりすぎるという指摘も多く、現在は指標の定義が改善されている）。

ウッドマイルズ/ウッドマイレージは、一般的なログジに比べて約 1.4 倍の木材量を使用している一方、ウッドマイルズは一般的なログジの約 1/9、ウッドマイレージは約 1/6 という結果で、地域の木材をたくさん使うと共に、輸送距離も削減していることが示されている。

木材の流通経路は複雑であった。調査して初めて分かったのが、枠や巾木などの既製品の輸送経路である。北海道産の原木が北海道内で単板に加工された後、岐阜県の加工工場に運ばれ、その後、関東の倉庫を経由してから再び北海道に戻ってきていた。

ウッドマイレージ CO2 は、一般的なログジに比べ 72%削減している。これは、トドマツの木の 1 年間の CO2 吸収量で換算すると 2,077 本分、ガソリン消費量換算では 3,792 リットル（ドラム缶約 19 本分）に相当する。

ウッドマイルズレポートの効果や課題

「普段何気なく使っている既製品や合板などは北海道でも生産しているし、レポートの作成を通じて、道産材であるのに道外の遠方まで運んで加工している実態を初めて知った。コスト低減の面でも全体の工事費に比べるとごくわずかな差でしかないと知り、今後は積極的に地域産、地域加工品の利用を訴えていきたいと考えている（担当設計者）」。

地域においては、FSC 森林認証や地域材を使用することの意義・理念だけでは、ユーザーに対してその住宅の優位性を示すことが困難なこともあることから、ウッドマイルズなどの指標を用いて、客観的な数値として示す取り組みを行っている。

ウッドマイルズは、木材の輸送距離を短縮し、環境負荷の低減を図ることに加えて地域材需要の活性化を目指す取り組みであり、地域材を使用することの優位性を示すツールとして活用している。